



研究フォーラム

みんなく公開講演会

自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る

おおた しんぺい
太田 心平

民博 研究戦略センター

民博は、2006年から毎年春に、毎日新聞社と共催でみんなく公開講演会を開催している。
今回は、人類の伝統的な自然観とその変化、そして現在における再評価についてとりあげた。

自然と文化

自然環境とどう向きあうかは、こんにち人びとを悩ませている課題である。ただ、人が自然に向きあいはじめたのは現代のことではない。かねてより人は、自然を敬い、畏れ、あるいは慣れ親しむことによって、自分たちの社会を作り上げてきた。

自然に関する問題意識は、低炭素社会の実現や生物多様性の保持といった点から語られがちである。だが、われわれは同時に、人間社会が古くからもっている自然との向きあい方にも着目する必要があるのではないか。それらがもつ知恵をあらためて吟味し、その実践にどのような変化が起きているのかについて考えてみることも、もうひとつの現代的課題であろう。

「自然」以前の異界の認識

今回の講演会では、アフリカの仮面舞踊とオセアニアの伝統医療というふたつのテーマによる講演がおこなわれた。

アフリカ南部、ザンビアのチェワ社会では、人の死後に喪に服し、一年ほどたつと喪明けの儀礼をおこなう。儀礼は、結社の男性たちが動物の形をした仮面を秘密裏に作って、それをかぶって人びとの前で踊り、最後には森に去っていくというものである。これは、森から来た動物の姿を借りて死者がよみがえり、地上に残した霊を吸収して、呪術や医療などの知識とその実践によって試みていたのだということが、この講演会でみえてきた。

現代社会での再評価

これらの伝統的な異界との向きあい方は、現代社会で消えゆく運命にあるのだろうか。チェワの社会は、キリスト教の浸透や政治的混乱という激動の時期をへてきた。だが、仮面舞踊は、それらの合間を柔軟にすり抜けるようにして、今も続けられているのみならず、近年には彼／彼女らの伝統として、外部者に対しても誇示されるようになってきている。

ヴァヌアツでは、病院や保健所が普及し、近代医療が無償で受けられるようになった。ところが、伝統医療の治療者たちも排除されていく。政府から公認のライセンスを受けるようになった。か

つ人びとのあいだでは、

近代医療で治療が難しい慢性疾患や難病に対し、

在来の薬草に有効な成分をみいだそうとする動きもみられる。伝統医療は近代医療と住みわけて共存しているという。

どちらの講演でも、伝統的な異界との向きあい



覆面をかぶったニャウの踊り手。ザンビア (1985年 撮影・吉田憲司)



薬草の搾り汁の準備。ヴァヌアツ (1994年 撮影・白川千尋)

人の社会から消えていく過程だと認識されている。こうした仮面舞踊の事例報告からは、生きている人の社会と、それから切り離された森、そして両者を媒介する存在としての森の動物たちという、チェワの人びとの認識方法が垣間みられた。

対して、オセアニアのヴァヌアツでは、人びとの病気を薬草や夢見で治療する治療者がいる。治療者は、治療の知識に特別な価値を置き、それを主として子どもに伝承する。病気というものを、自然がもたらす人の「内なる自然」と考えるならば、病気、薬草、夢の世界は、すべて人の社会と区分

方は、西欧近代的な社会制度や世界認識が導入された後、西欧近代的なシステムのなかで、その管理下に置きうるような、何らかの位置づけにおさまっている様子が報告されたといえよう。それと同時に、西欧近代的な自然との向きあい方とは違った場において、在来のシステムにあらためて重要な価値がみいだされることがわかった。

講演会のもたらしたもの

今回の講演会は、人が自然と交渉する多様な原点を参加者に感じてもらう場であった。それと同時に、現代社会のキーワードとなっている「自然」という概念を相対化して考えなおす機会になったのではないだろうか。また、日本に暮らしている限り「珍奇な風習」とか「古い迷信」として他者化されがちなアフリカや太平洋の伝統について、現代的な問題として、かつ日本の伝統にも通じるものとして、理解を深めるきっかけになったと考えられる。

二〇一一年三月一八日に大阪市北区のオーバルホールにおいて、みんなく公開講演会「自然と向きあう人びとの今——太平洋とアフリカに見る」を開催。講演は本館の吉田憲司教授「アフリカ・チェワ社会における仮面舞踊の現在」および白川千尋教授「オセアニア・ヴァヌアツの伝統医療はいま」加えて、太田心平助教の司会でパネル・ディスカッションがおこなわれた。